

北朝鮮問題を軍事的手段によって解決するならば

漢和防務評論 20170826(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

北朝鮮の核と弾道ミサイルによる軍事的威嚇はエスカレートする一方ですが、漢和防務評論ネット版に軍事的手段で解決する方向に向かった場合、米中露は、どのような対応を採るか、試論を掲載しました。北朝鮮占領後の管理方式はどうか？費用は誰が出すのか？全く見えていません。日本が費用だけ負担させられてはたまりません。

平可夫

KDR は、北朝鮮核問題について、国連安保理決議の範囲内で各種決議を厳格に履行した上で政治的に解決されるべきである、と一貫して主張してきた。

しかし一旦以下の状況が発生した場合、戦争が回避できるかどうか？予測は困難である。

1. 北朝鮮がまもなく或いはすでに弾道ミサイルの核弾頭化を完了
2. 北朝鮮がまもなく或いはすでに **ICBM** の実験と配備を完了

この2つの状況が一旦現実となれば、特に2番目の項目が証明されれば、米国は核及び弾道ミサイル施設を徹底的に攻撃する可能性が極めて高い。米国の同盟国及び中国、ロシアは、米国がこのような行動を採ることを疑う必要はない。

キーポイントは、いかなる状況下で中朝戦争が勃発する可能性があるか？である。

3. 中国が中朝国境を徹底封鎖すれば、もはやいかなる援助物資も入らない。重要な石油、糧食、原料の流入が完全に絶たれ、北朝鮮は逆上する。中朝国境では、北朝鮮軍の小規模侵入、スパイの潜入、殺人、誘拐など紛争が続発する。(実際は過去に何度も発生している) 中国は、我慢の限界にきて北朝鮮を教訓するため、最終的には懲罰することを決定する。1979年のベトナム懲罰戦争がそれであり、儒教社会の王権思想に符合する。

この類の懲罰活動は、時間が限定された極めて激しい砲撃、小規模な空中攻撃が考えられ、攻撃範囲は限定される。中国がこのような”陸軍火力戦”を仕掛けることは、中国陸軍のロケット砲兵、機動砲兵が中朝国境の中国側から、首都を含む北朝鮮の大部分を精確に攻撃できることを意味する。**AR-3** ロケット砲はすでに2016年に陸軍砲兵に装備が開始され、射程は**300KM**に達する。**AR-2**は射程**150KM**、ミッドコースで”北斗-2”衛星誘導を受け命中精度は高い。また北部戦区陸軍は、大量の**52**口径**155MM**自走砲を装備しその”北斗-2”誘導砲弾は最大射程**40KM**である。

何を論じようと、如何なる理由があろうと、北朝鮮に弾道ミサイルの発射、核

兵器使用の兆候が出現した場合は、米国が対象であろうと、中国が対象であろうと、ワシントンにも北京にも軍事的解決の道しか残されていない。
もし”金三世”に理性があるならば、ここまでは至らないであろう。しかしいくつかの可能性は排除できない。

4. 北朝鮮は、中朝国境で常に流血事件を起こしている。中国は我慢の限界に来ている。北朝鮮に対し、縦深性のある限定的な懲罰的砲撃、航空攻撃を加えた場合、北朝鮮は報復をエスカレートさせ、弾道ミサイルを使用して中国の大都市を攻撃する、あるいは中国の三峡ダムを攻撃する可能性がある。

このような行動に関して、實際上中国官方の「環球時報」は、すでに4月及び5月の中朝論戦で言及した：北朝鮮の暴発から身を守ろう！と。

もし中国及び日本に対する弾道ミサイルの使用あるいは米国に対する攻撃実施を含む北朝鮮の大規模な動きが真に出現した場合、戦争は不可避である。現在の状況から見ると可能性は小さい。しかし多くの予測不可能な要素を考慮せざるを得ない：

A. 中、米、日、露が今後北朝鮮に対する新たな経済制裁を課すことによって、北朝鮮内部で人民軍の反乱、暴動等々、動揺が起こる。また金正恩が突然死亡する。

燃料が極めて不足しているので、北朝鮮人民軍機械化部隊が中国国内に大規模侵攻したり、南に向かって進撃するのは不可能である。最も可能性があるのは砲撃と弾道ミサイル攻撃である。金正恩は火砲を好む。火力については中国、韓国が圧倒的に有利である。中韓双方が探知距離 60 乃至 100KM の定位レーダーを保有している。中国製品はタイ国にも輸出されている。したがって北朝鮮の火砲の位置を精確に測定することができる。このほか火砲については、ロケット砲の数量、品質、精度が中国、韓国が圧倒的に優れている。一旦砲撃が始まると、火の海になるのは北朝鮮である。

B. 2004 年以降、米国、日本、中国、韓国の偵察衛星は、対北朝鮮偵察活動を行ってきた。一瞬たりとも北朝鮮の核施設、弾道ミサイル陣地、洞窟格納庫の偵察活動を怠ってはいない。弾道ミサイルの発射、核弾頭の使用は、ほとんど兆候が現れる。大量の液体燃料を使うロケットは発射準備時間が長い。例え洞窟内で燃料を注入し、洞窟から引き出したあと、直ちに発射したところで一定の展開時間が必要になる。北朝鮮の何回かの弾道ミサイル発射演習は高速道路上で行われた。これらの陣地は予め準備された位置にある。攻撃精度を高めるため、陣地の事前の測量が必要であり、どこからでも発射できるわけではない。中国、北朝鮮のロケット部隊は、旧ソ連の戦略ロケット軍から学習した。社会主義国家の弾道ミサイルの発射手順は、初期はソ連の P-2 ロケット発射手順から学んだ。北朝鮮が如何なる種類の弾道ミサイルを、どのような陣地から発射するのか、これらは中国、米国は明確に把握している。北朝鮮の弾道ミサイル洞窟施設は、中国、韓国、米国によってすでに掌握されている、と KDR は考える。

このほか無線通信の傍受、無人機、スパイ衛星、U-2 機による継続的な偵察活動があり、平壤の動向、金正恩の活動等等、北朝鮮の軍事攻撃意図はおおむね掌握できる。

北朝鮮は、大量の核施設、弾道ミサイル施設を中朝国境から 50 乃至 100KM の範囲に建設している。その狙いは、中国を核で”拉致”し、米国が輕易に軍事攻撃ができないようにするためである。中国が軍事攻撃に反対するのは戦争に巻き込まれたくないからである。しかし北朝鮮のこのような狡猾な手段は、同時に中国軍がこの地域を容易に攻撃でき、支配できることを意味する。

北朝鮮の戦略ミサイル、核弾頭基地は 100%地下化されている。しかし一旦洞窟基地の入口が爆撃破壊されると、これらの兵器は運用が不可能になる。

したがって、北朝鮮が、中国、日本、米国に対してミサイルを一発でも発射し、或いは大規模発射の兆候が出現しさえすれば、軍事的解決手段が開始されることを意味し、この段階になると米国、中国、ロシア、韓国、日本の軍隊は明らかに戦備状態に入る。

5. 一旦このような状況になると、予想される大国の軍事行動は、1968 年の”プラハの春”、1979 年の”ソ連軍のカブール侵攻”のように、典型的な軍事斬首作戦が開始される。空挺降下により最初に首都を全面制圧し、相手の希望を完全に断つ。この段階では：米軍は北の全て戦略施設、首都の戦略目標を徹底的に攻撃し破壊する。

6. 中国は、武力侵攻の決定を下したあと、空軍機、戦略巡航ミサイル、ロケット軍部隊により、北朝鮮の防空施設、戦闘機基地に対して全面攻撃を行う可能性が極めて高い。制空権を安定獲得した後、平壤、元山（ロシア軍が行う）等の重要都市に対して空挺降下、上陸作戦を行う。重要目標は平壤である。これと同時に中露両軍の戦車、機械化旅団は、大規模に越境する。また北朝鮮の主要な戦略施設、核基地、弾道ミサイル基地には、行動が敏速な中露両軍の空挺降下部隊が出現するであろう。

7. これと同時にロシア太平洋艦隊、中国北海艦隊は、元山、平壤に対し上陸作戦を実施する。空挺降下部隊を伴って平壤の戦略施設は迅速に占領される。ロシア軍降下部隊は、独立して戦略使命を遂行する作戦思想の下で行動する。連続して作戦できる時間は 72 時間以上である。

2006 年に KDR が行った中朝戦争に関する討論で本誌はすでに分析した：第 38、39 集団軍機械化師団は、越境後、早ければ 4 乃至 6 時間で平壤に到達できる。

8. 燃料が極めて不足しているため、人民軍の機械化軍団、戦車師団は、大規模な運動戦ができない、と KDR は考える。近年来、人民軍が実施した大規模軍事演習の写真を分析すると：人民軍のうち真に作戦能力を具備する部隊規模は 5 万名を超えない、と考えられる。海軍、空軍は、基本的に海上、航空遊撃隊である。

最後の結論：金王朝は大国と 70 年間わたりあってきたので”先祖伝来の秘法”がある。しかし今後は情勢が決定的に変化する可能性がある。一旦中国が徹底して経済封鎖、石油禁輸を実施したならば、北朝鮮はそのような経験がないので、朝鮮半島全体の情勢が劇的に変化することもありうる。

現在のような新帝国主義、社会帝国主義（中国を指す）の時代に、北朝鮮、台湾は、中米の争いの渦中にあり、将棋の駒に過ぎなくなっている。ワシントン、北京、モスクワが如何に取引するかは誰も分からない。トランプは商売人である。北京は商売に精通している。北朝鮮問題で、北京が米国に如何なる譲歩をしようとも”転んでもただでは起きない”。極めて高いものを要求するだろう。しかしながら、新たな問題がでてきた。たとえ中国が北朝鮮に対する軍事行動を迫られても能力はあるのか？

第一に空挺降下兵力が不足している。現在は 3 個旅団のみであり、今後拡大する可能性が極めて高い。

ソ連軍降下部隊は、1980 年代は 13 個旅団であった。現在も 4 個師団、4 個旅団、45000 名で拡大中である。計画では 80000 名に達する。さらにロシアは大型軍用輸送機を保有している。ロシア東方軍区で最も北朝鮮国境近くに所在する降下部隊は USSURIYSK に駐屯する第 83 近衛空挺降下旅団である。また URANUDE には第 11 空挺降下旅団が駐屯しており、OMSK には第 242 訓練センターがある。

中国の第 15 空降兵軍が平壤を占領するには兵力も輸送手段も不足している。KDR の推計では、最も作戦能力を具備している朝鮮人民軍の規模は約 50000 名である。これら兵力は主として平壤周辺と市街地域に集中しており、言わば金正恩の護衛部隊である。陸軍に比べさらに迅速な移動速度を持つ部隊は海軍陸戦隊である。しかし北海艦隊には現在海軍陸戦隊が配備されていない。中国の一切の軍事装備は、過去 20 年間、主として台湾方向に向いていた。現時点で見ると、中国東部戦区の多くの陸軍水陸両用機械化歩兵旅団は、少なくとも 2 個、すでに海軍陸戦隊に改編されている。

ロシア太平洋艦隊海軍歩兵（海軍陸戦隊と呼称）部隊は、第 3、第 40 団を保有し、必要時には元山への上陸作戦を行う可能性が極めて高い。

中国海軍陸戦隊は、拡大後、3 個旅団になった。南海艦隊に 1 個、東海艦隊に 2 個配備され、1 個旅団 6000 名として計算すると、合計兵力は約 18000 名である。一旦開戦となると、直接平壤地区に上陸する。これが最も近道である。遼東半島から南浦、OCHON までの直線距離は 200KM である。おおよそ台湾中部地区の幅に相当する。鍵は速度である。大型エアクッション艇が不足している。ZUBR 大型エアクッション艇は直接上陸が可能であり、平均時速 60KM で、3 時間で平壤西部の OCHON 地区に到達する。ここは重要な戦略的要地であり、飛行場もある。OCHON から平壤まで 40KM である。南浦から平壤まで 45KM

である。したがって最も迅速に平壤に進入できる部隊は空降部隊である。中国陸軍の大軍が集結する可能性が最も高いのは丹東である。これは 1950 年の出撃方式に似ている。ここから平壤まで 170KM しかない。もし厳しい抵抗がなければ、機械化歩兵旅団の前進平均速度は時速 40KM に達する。4 時間前後で中国軍部隊は平壤中心部に到達する。しかし戦闘状況を考慮しなければならない。2006 年の KDR の図上演習では、中国陸軍が平壤に到達する時間は約 6 乃至 10 時間と設定した。最も可能性があるのは鉄道線路に沿った進攻である。上述の想定で、最大の困難な問題は、軍事ではなく政治、外交である。第一に、米中露の 3 大国が密接に調整できるのか？もしそれぞれ独自の計算で行動したならば、相互の矛盾を北朝鮮に利用されるだけである。最も重要なことは、北朝鮮問題を軍事で解決したあと、誰が再建の責任を負うか？である。占領を維持するには大量の資金が必要である。北朝鮮の再建費用は、当時の東ドイツの再建よりもはるかに経費がかかる。南朝鮮（韓国）すら自ら統一しようとする熱意がない。たとえ半島北部地区が最終的に中露の共同管理になったとしても新たな二つの国家、東と西の朝鮮が出来るだけである。再建費用と核施設及び弾道ミサイルの破棄費用は誰が負担するのか？

したがって北朝鮮核問題の最良の解決方式は、北朝鮮が自ら平和国家に転換するよう促すことである。しかし、北朝鮮はどの程度認めるか、金四代の出現は不可能であり、時間は北朝鮮に不利である。

以上